

# ピアノ初心者がつまずきやすい点と理解のための工夫

兵藤 恭子

Contrive Ways for Understanding of Novice Piano Players' Difficulties.

Kyoko HYODO

キーワード：ピアノ 苦手

## 1. はじめに

小学校へ教育実習に行った学生から、「音楽の授業では、ピアノを使用せずに、CDの伴奏で唱歌を歌わせていました。」と聞いた。一部の小学校の現状である。教育現場でピアノを使用していないという事実を目の当たりにして、学生達は2年間苦労して練習した事は無駄だったと感じるのではないだろうか。又逆にピアノを弾かなければならないプレッシャーから解放され、ほっと安心する者もいるかも知れない。

音楽の授業でピアノを使用する利点を考えてみると、子供に合わせた音量や調性（音の高さ）で歌わせる事が出来る、テンポも変えることが出来る、又むずかしい箇所は取り出して繰り返し練習が出来る、音楽的な表現を工夫する事が出来る、等があげられる。これ等の利点があるにもかかわらず、小学校の授業でピアノを使用しない理由は様々あると思われるが、その中の1つに、教員がピアノに対する苦手意識を持っている事が考えられる。数年前に本学で教員免許更新の講習を行った事があるが、ベテラン教員の中にも1つ1つ音を読むのがやっとなの方や、全く音符が読めず紙の裏にカタカナで音名を書いた物を持参した方もいらした。

失礼ながら学生時代よりも上達した方は殆どいらっしやらない様に感じられた。

音符が全く読めない年配の教員が学生だった頃には、ピアノの授業は必修科目ではなかったかもしれないが、これから教員や幼児教育者を志す学生には私達も丁寧に基礎の部分教えて

いかなくなくてはならないと思う。

学生にピアノを教えるに当たり教師側は、大譜表で示される音符が読めて、ピアノの鍵盤の位置と、指番号、音の長さ（リズム）がわかれば苦労せずにピアノが弾けるはずだと考えてしまう。しかし現実にはその様に簡単にはいかない。特に音楽が苦手なピアノに抵抗を感じている初心者が教育現場に於いてピアノを使って指導出来るようになる為には、楽譜の正しい読み方と、きちんとした奏法を1つ1つ段階を追ってしっかりと身に付ける必要がある。

本論文では、ピアノが苦手な学習者がつまずいてしまう点を取り上げ、修得のための工夫や注意点を述べる。導入の段階からしっかりと指導しておきたい点を、バイエル66番までのハ長調の範囲の中から本学で学ぶ楽曲を対象に考察してみた。

2. 指導のポイント

《楽譜と鍵盤の関係》

①高い音・低い音

楽譜と鍵盤の関係を理解するに当たり、音の高低を知る必要がある。そもそも、高い音・低い音とは何か。一般的に昔から「声が高い」とは、声が大きく、うるさい時に使われる。反対に、「低い声」とは静かな声を指す。しかし音楽に於いて高い・低いとは、ピッチのことを指している。女性の声は高い、男性の声は低い。猫の声は高い、ライオンの声は低い等、具体的に例をあげて思い違いが無い様にしておくことも必要である。又相対的に2つの音を比較して、ドの音のほうがミの音より低い(高い)等という事にも触れておきたい。

②音の高低と楽譜・鍵盤の関係

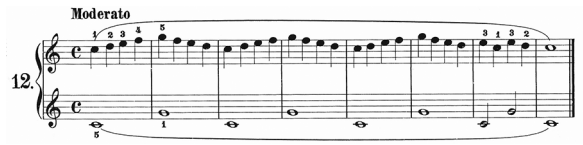
音の高低を確認する為に学生には誰でも知っていると思われる「ドレミファソラシド」を歌ってもらおう。その際に人差し指を上へ向けて音のピッチが上がっていく事を確認させる。そして次に「ドシラソファミレド」を人差し指を下へ向けながら歌い、ピッチが下がっていくことを確認させる。「ドシラソファミレド」がうまく言えない人には、繰り返し練習させる。そして音の位置関係も確認しておきたい。「ド」より2度下の音は? 「ソ」より3度上の音は? 等クイズのようにして楽しく音の上下関係が素早く答えられるような練習も工夫すると良いであろう。又譜面上では高い音は上の方に記され、低い音は下の方に記されることを理解してもらおう。楽譜上の上下と音のピッチの上下は一致するので、ここまでは容易に理解できる。

次にピアノの鍵盤と楽譜の関係をみてみよう。鍵盤上ではピッチが上がる時は右方向へ、ピッチが下がる時は左方向へ進んでいく事を確認したい。

ここまで理解できたら次は演奏する際の楽譜の読み方である。楽譜は左から右へと読み進んでいくものである。「ドレミファ」と上昇していく時は違和感なく受け入れられることであろう。しかし「ドシラソ」と下降していく時に楽譜では右へ読み進みながら、実際に演奏する手は、鍵盤の左方向へ向かって弾いていくのである。

初心者はこの辺りを理解するのも意外と大変である。バイエル12・14・15番を実際に弾きながら、よく理解して慣れることが肝心である。

バイエル12番



《演奏技術について》

①手の形

ピアノを弾く時に、手の形は重要である。一般に「手の形を丸くして」と言われる事が多いが「指を伸ばさずに曲げて」と言った方が理解し易いようである。又ピアノを始めたばかりの人に、手首が極端に下がってしまう例が多く見られる。これはたどたどしい演奏になってしまう1つの原因になると思われるので、早めの修正が望まれる。まず椅子の位置が前に行き過ぎているのが原因の場合もあるので、正しい位置に座る事が大事である。そのうえで演奏をした時に手首が下がり注意をすると、手首を上げると同時に肩まで上げてしまう人がいる。この様な人の場合は「うらめしや」のポーズをとってもらおう。このポーズをする事により、肩を上げず手首を少しあげる感覚を掴んでもらうことができる。又5本の指の内、特に短く細く弱い5の指が先で弾けないのが原因で手首が下がってしまう人も多い。

この場合は5の指に力を入れすぎない様にした上で、指の先の方で弾く事を練習し、無理なく弾ける手の形を修得したい。29番では、5の指を5拍延ばす部分が多数出てくる。その箇所では5の指を弾いた時に手首が下がらぬよう又肩が上がらぬように注意していきたい。

バイエル29番



## ピアノ初心者がつまずきやすい点と理解のための工夫

### ②鍵盤上の指の位置

ピアノを習い始めた段階で注意したいのは、指を置く位置である。白鍵の手前の、淵に近い場所に指を置くのではなく、少し奥の黒鍵に近い中程を弾く習慣をつけていきたい。黒鍵が出てきた時に、手が奥へ行ったり、手前にきたりする無駄な動きを避ける為である。

### ③しっかりしたタッチ

ピアノは電子ピアノとは異なり、触るだけでは音が出ない楽器である。ピアノでよく響く鮮明な音を出すためには、タッチが大事である。指を鍵盤に向かって下ろす時の勢い(スピード)によって音色や音の強さが違ってくる。今弾いている音の次に弾く指の指先を下に向けて、少し上に用意して素早く打鍵すると響きのある明るい音になる。こうして1音1音弾く習慣をつけると次第にしっかりしたタッチが身に付いてくる。

### ④レガート奏法

音と音をなめらかにつなげて弾くレガート奏法は、次の指が鍵盤を打つ瞬間に前の指を鍵盤から離さなくてはならない。その動作がうまくいかずに前の音が残って濁ってしまう場合がある。又逆に、次の指の打鍵より早く前の指が鍵盤から離れてしまい、レガート奏法ができずに音が切れ切れになる場合もある。これ等は主に、3・4・5指を連続して弾く時に見られる事が多い。学生には自分の弾いている音を良く聞きながら、指の入れ替えがスムーズに出来るまで繰り返し練習をしてもらいたい。レガート奏法は、初歩の12・14・15番でマスターしたい技術である。

#### バイエル 14 番



又、18番のように、左手で和音の伴奏を刻む曲では、和音を弾き直すのと同時にレガートで弾くはずの右手も切れてしまうものである。右手をレガートで弾くためには、非常に遅い

テンポで左右の動きを確認する必要がある。

例えば、18番の2小節目から3小節目に移る部分では、2小節目3拍目の右手C音を押さえている間に左手を離し、3小節目1拍目の音を左右同時に弾く。この時に左手のG音も一旦鍵盤から離して再度弾き直す様に指導したい。

#### バイエル 18 番



### 《楽典にかかわる点》

#### ① 4分の4拍子・4分の3拍子

4分の4拍子等、拍子の意味については最初の段階で説明しておく必要がある。

下の4は4分音符を意味していて、上の4は1小節に4つ、つまり4分音符が1小節に4つ入るのが4分の4拍子である。ここで同じテンポで拍をカウントしなくてはならない事も最初に教えておきたい。

18番・37番等4分の3拍子では、曲の途中で1拍休符を入れて部分的に4分の4拍子になってしまう演奏が多く見られる。18番・37番共に、8小節目が4拍子にならぬよう注意をする。

3拍子の曲は最初から最後まで同じテンポで123・123と拍子を数えて、3拍子に乗って演奏する事を意識させたい。

#### バイエル 37 番



#### ②リズムについて

音符の種類、長さについて説明した上でリズムや拍子をよく理解できない学生の場合、リズムは時間の経過を様々な長さに区切っていくものと説明すると理解出来る人もいる。又時間の経過を均等な速度で刻んで計っていくのが拍であると考えられる。

リズムが複雑になりさらに両手になると、楽

譜を読むのが大変になってくる。譜読みが苦手な人のために♪や♪で表記されている音符の長さがひと目で理解出来るように、又音符の長さをイメージしやすくするために、各音符を四角いマスのような形で表してみた。図1

- ・4分音符を□(□1つ分)と表す。同じく
- ・2分音符は□□(□2つ分)
- ・付点2分音符は□□□(□3つ分)
- ・全音符は□□□□(□4つ分)とする。



バイエル 35 番の1部分を□で表してみる

図1

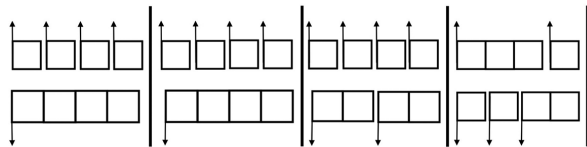


図1は演奏する場合は左から右へ読み進んでいき、□の左端の矢印部分で音を出す事になる。たくさんの楽譜を読み練習を重ねていく事により、音符の長さを見た瞬間に理解し、左右のリズムの組み合わせもわかる様になるが、理解が難しい学生には、この図を使用した説明も効果的であると思われる。

又このように表すと、両手で弾く時の左右の手で音を弾くタイミングがわかり易くなる。

両手での演奏は進捗が進むにつれて難しくなっていくが、必ず片手ずつの練習もさせる事により、楽譜をいい加減に読むことが無いようにしたい。特に左手のみの練習は、正しく音符やリズムを読んでいるかを確認できるので、是非やらせてみたい。

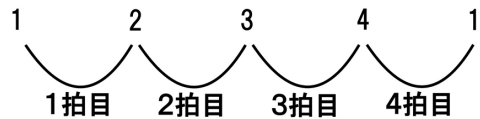
ピアノ上達への近道は、繰り返しの練習であ

る事を忘れてはならない。どんなに練習方法を教えられても、実際のピアノでの練習なしでは上達することは難しいであろう。「ピアノが苦手」と言う人の中にはこの事をなかなか理解しない者が多いのは事実である。

### ③音符の長さを正確に弾く

特に休符の前や曲の最後の音の長さはいい加減になりがちである。曲の最後の音が全音符であれば、1,2,3,4,1, と数えて、最後の「1」で手を離す。図2のように、1から2までが1拍目、2から3までが2拍目である。4拍目は4から1と数えるまでであることを説明し、きちんとした長さで演奏する習慣を身に付けたい。

図2



### ④重音・和音の読み方

バイエル 18 番の左手の重音は、下から「ミソ」と読むのであるが、上から「ソミ」と読んでしまう者もいる。かなり進捗が進んだピアノ経験者であっても読み易い上の音から読んでしまう傾向があるので注意したい。

### ⑤8分音符

46番からは8分音符が使われている。37番までのリズムを良く理解した上で8分音符を勉強したい。46番では、8分音符は4分音符の半分の長さであることを説明する。左手の4分音符1つに対して、右手の8分音符は2つ弾く事になる。つまり右手の音は倍の速さで弾くのである。37番までの4分音符、2分音符、全音符が正しく理解できていれば、8分音符の長さもすぐに理解出来るであろう。

バイエル 46 番



## ピアノ初心者がつまずきやすい点と理解のための工夫

### ⑥付点のリズム

48番では初心者のために  $\overset{\frown}{\text{♩}}$   $\overset{\frown}{\text{♩}}$  と  $\overset{\frown}{\text{♩}}$   $\overset{\frown}{\text{♩}}$  は同じリズムである事を示している。付点4分音符と8分音符の長さの関係は数字で示すと1.5と0.5になる。48番のリズムが両手でうまく弾けない場合は、「いちにとさん」「1、2と3」と「と」を入れて数えながら弾かせるとうまく弾けるようである。

#### バイエル 48 番

### ⑦ 8分の6拍子

52番は初めての8分の6拍子である。8分音符を1拍と数え、3拍子が1小節に2つあると考える。そして大きく2拍子と捉える事を説明する。又4分の4拍子等、4分音符が基準の曲とは異なり、

$\overset{\frown}{\text{♩}}$  = 1拍、 $\overset{\frown}{\text{♩}}$  = 2拍、 $\overset{\frown}{\text{♩}}$  = 3拍、 $\overset{\frown}{\text{♩}}$  = 6拍と  
あらかじめ教えておくと理解しやすい。

#### バイエル 52 番

### 《音階の弾き方》

#### ハ長調の音階

ここで指くぐり、指またぎが初めて出てくる。「音階ドレミファソラシドは8つ音があり、指の数は5本しか無い。足りない3本を、指くぐりや指またぎを使い補う。」と説明する。又音階をスムーズに弾く為には、指くぐり、指またぎを素早く行う事がポイントになる。右手の上りの音階の場合、1の指で弾いているドの音から次のレを弾いた瞬間に、手の形は丸くしたまま1の指を丁度「4つ」を指で示す時のようにしっかりと素早く折り曲げる、そのまま3の指を弾き、なるべく肘を張らずにファの音を1の指で弾く。下りの音階はドシラソファを

5 4 3 2 1の指で弾き、ファを押さえたら素早く次の3の指を、ミの真上に用意する、この時も1の指を深く折ると遅れずに滑らかに弾く事が出来る。これ等の練習は遅いテンポから始めて少しずつテンポを上げていくと良い。そして両手で音階を弾く部分は大変むずかしいので、繰り返しの練習が必要である。

#### ハ長調音階

### 《デュナーミクと曲の表現》

#### ①クレッシェンド・ディミネンド

バイエルも50番代になると、強弱が出てくる。f・pだけではなく、58・60・66番にはクレッシェンドとディミネンドが出てきている。58番では音が上昇している箇所がクレッシェンド、下降している箇所はディミネンドが指示されているので、表現しやすい形になっている。是非曲想をつけて演奏してみたい。

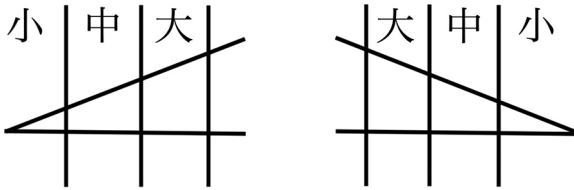
クレッシェンドの部分は一旦音量を落として弱い音から少しずつ音量を上げていくと効果がより大きく感じられる。

今まで弾いていた音量から更に強くしていくのは初心者で、まだタッチの弱い学生には難しいであろう。

#### バイエル 58 番

66番のクレッシェンドとディミネンドは、なかなか難しい音形の箇所が付いているが、ある学生は

図3



と楽譜に書き込んでいた。自分で考えたそうで、なかなか良い考えだと感心した。

バイエル 66 番



②長調の表現・短調の表現

60番はイ短調の曲である。中間部分がハ長調に転調し、再びイ短調に戻っている、短調は暗く寂しい曲調であり、長調は明るい曲調になるので、長調に転調した箇所では明るい気持ちで演奏し、自分の気持ちを切り替える事を体感してほしい。

バイエル 60 番



3. おわりに

ピアノを学習するにあたり、正確に楽譜を読み、作曲者の意図した音楽を正しく再現する。この事は大変に重要である。

小学校の音楽で学習する共通教材は、昭和33年に設定されて以来、長い間歌い継がれてきた曲が指定されており、必ず各学年で学習する事が義務付けられている。これは様々な世代の人たちが同じ楽曲を共有し、一緒に同じ歌を歌う事が出来るための配慮である。幸いなことに西洋で考案された楽譜は、音楽を正確に伝えるために考えられた優れた伝達方法である。私達が楽譜を正しく読み再現する方法を学び、楽曲を後世に伝える意義は大きいのである。

本論文ではバイエル 66 番までのハ長調の部分のみについて述べたが、ここまでの部分はピアノを学ぶ上の基礎中の基礎であり、正しく修得しておけば、この後の複雑なリズムが出てきた時にも応用を効かせて演奏することが出来る。

私の恩師である小学校低学年時の男性の担任は、不器用な太い指で童謡の伴奏をしてくださった。私は、先生の演奏の真剣な姿と共に、教師としての責任というものまでも教えていただいたのであった。指導教員が教科を教える姿勢は、子供達に大きな影響を与えるものである。

このような体験から、小学校教諭や幼児教育者を目指して勉強している学生達には、例えばピアノが苦手であってもしっかりと正確な演奏技術を学んで、是非自身の伴奏で子供達に歌を教えられる様に努力してほしいと切望する。

参考文献

小学校学習指導要領 平成 29 年  
 小学校学習指導要領 昭和 33 年  
 全訳バイエルピアノ教則本 全音楽譜出版社